おくすり Q&A
潰瘍性大腸炎治療薬の新しい薬について教えてください

2025 年、日本で新しい作用機序を持つ潰瘍性大腸炎の治療薬が発売されました。この治療薬は**スフィンゴシン 1- リン酸（省略して S1P と呼ばれます）受容体調整薬**というカテゴリーの薬です。S1P はリンパ球と深い関係があり、2025 年に大阪大学の坂口志文博士がノーベル生理学・医学賞を受賞するテーマとなった制御性 T 細胞の分化にも関わっていると言われています。

Q. 潰瘍性大腸炎はどんな病気ですか。

A. 潰瘍性大腸炎は、**大腸の粘膜（最も内側の層）にびらんや潰瘍ができる慢性の炎症性疾患**です。下痢や腹痛、血便などの症状が特徴で、症状が強く現れる活動期と症状がほとんどない寛解期を繰り返します。発症する年齢のピークは男女ともに 20 代で、比較的若い方がかかる可能性もある病気です。病気の原因ははっきりとわかっていませんが、食生活の変化、腸内細菌の関与や免疫機構が正常に機能していないことが原因になっている可能性が考えられています。

Q. S1P 受容体調整薬は、どのようにして潰瘍性大腸炎に効果を表すのですか。

A. **リンパ球がリンパ節からリンパ管に移動しないように調整する**ことで潰瘍性大腸炎の炎症を起こしにくい体内環境を作り出します。通常、リンパ球はリンパ節の中に多く存在し、必要に応じてリンパ管へ移動して、リンパや血液の流れに乗って全身を回り免疫細胞として働きます。S1P 受容体調整薬は、血液やリンパに存在するリンパ球の S1P 受容体に結合する薬です。薬が結合した S1P 受容体はリンパ球細胞の内側に移動して細胞の外にある S1P と結合することが出来なくなってしまいます。リンパ球は、リンパ管に S1P が多いことを受容体で感知することで、リンパ節からリンパ管へ移動することがわかっています。S1P 受容体調整薬は、リンパ節に存在するリンパ球に S1P を感知させないことで、血中、ひいては大腸の周辺に到達するリンパ球の数を減らし、潰瘍性大腸炎患者が炎症を起こしにくい環境を作ることで効果を発揮すると考えられています。

Q. S1P 受容体調整薬を服用中に気を付けることは何ですか。

A. 普段から**心臓の機能の低下や目の見え方の変化**に気を付けてください。**めまい**や**ふらつき**がみられることが多いので、**転倒**などに気を付けて生活してください。**感染症**にかかりやすくなるので十分注意をするとともに、**生ワクチンに分類される予防接種を受けることができない**ことを覚えておきましょう。
S1P 受容体調整薬は**ゼポジア® カプセル**と**ベルスピティ® 錠**の 2 種類の薬が発売されています。重大な副作用には共通するものが報告されています。S1P 受容体調整薬の投与を開始したときや増量したときには高頻度で心臓の脈が遅くなる**徐脈**が報告されています。脈が遅いことに気がついた、坂道などでひどく**動悸**がするようになった時は、循環器科の受診が必要な場合があります。**黄斑浮腫**を生じる方がいるので物が二重に見えるなど目の見え方に変化がある時は眼科の受診を考えましょう。薬の作用で血液中のリンパ球が減ってしまうので感染症にもかかりやすくなります。そのため、生ワクチンは使ってはいけません。生ワクチンには**麻疹風疹混合ワクチン（MR ワクチン）**や、昨年から本格的に使われ始めている経鼻インフルエンザワクチンの**フルミスト®** などがあります。

執筆薬剤師　藪下 健太郎

わたしの健康とくすり

第358号

今月の内容

- 疾患シリーズ　好酸球性消化管疾患《連載・第 1 回目》～病態編～
- ちょっとお耳を……　点鼻によるインフルエンザの予防接種について
- おくすり Q & A　潰瘍性大腸炎治療薬の新しい薬について教えてください

2025 年 11 月発行

発行者　八王子薬剤センター　橘 隆二
東京都八王子市館町 1097　電話 042-666-0931

協　力　八王子薬剤師会

疾患シリーズ《連載・第１回目》
好酸球性消化管疾患 ～病態編～

好酸球性消化管疾患は、食物などが抗原となってアレルギー反応が起こり、それらの刺激によって白血球の一種である好酸球が消化管粘膜に非常に多く集まり、消化管に持続的な慢性炎症を引き起こす疾患の総称です。飲み込みづらさや胸焼け、腹痛、下痢といった様々な消化器症状がみられます。症状自体は他の消化管疾患でもよくみられるもので鑑別が困難ですが、内視鏡検査などで好酸球性消化管疾患が疑われた場合に炎症部位の生検を行い、炎症部位に好酸球が集まっていることが証明され診断されます。近年、医師の間での疾患の認知度が高まってきたこともあり、世界的に患者数が増加しています。

好酸球による炎症が引き起こされる原因は特定されていませんが、アレルギー反応がひとつの原因と言われています。食物中のアレルゲンなどが原因となることが多いのですが、アレルゲンが特定されないケースがほとんどです。また背景として気管支喘息やアトピー性皮膚炎のなどの好酸球が関連するアレルギー疾患を持っている方が多いとされています。

好酸球による炎症が起こる場所によって、大きく好酸球性食道炎と好酸球性胃腸炎に分類されています。患者数には地域差があり、好酸球性食道炎は欧米が多く、好酸球性胃腸炎は日本人に多いとされています。幼児から成人まであらゆる年齢層で発症します。（新生児～乳幼児期では新生児・乳幼児食物蛋白誘発胃腸症と別に分類され、一般的な食物アレルギーとは異なる疾患です。）好酸球性消化管疾患は稀な疾患であり、厚生労働省の研究班による報告では国内患者数は約 6,000 人と報告されています。

また好酸球性消化管疾患は症状の現れ方により単発型、間欠型、持続型の3つの病型に分類されます。成人患者の約65%が持続型とされ、生涯にわたって症状をコントロールするための治療が必要です。

好酸球性食道炎	好酸球性食道炎は消化管の中でも食道のみに炎症があるものです。飲み込みづらさや胸焼けが主な症状で、慢性的な炎症が持続し症状が進行すると食道が狭くなり、食事が詰まってしまうこともあります。患者は地域差だけでなく、30 ～ 50 歳代の男性での報告が多いことも特徴です。
好酸球性胃腸炎	好酸球性胃腸炎は消化管の胃、十二指腸、小腸、大腸のいずれかもしくは複数の部位に炎症があるものです。腹痛、下痢、嘔吐などの症状がみられます。胃、十二指腸、小腸での炎症が最も多いとされています。好酸球性食道炎と異なり、男女差はないとされています。

次回は、好酸球性消化管疾患の治療についてお話しします。

執筆薬剤師　加藤 哲教

ちょっとお耳を……
点鼻によるインフルエンザの予防接種について

最近寒くなり、インフルエンザが流行し始めています。インフルエンザの予防接種はお済みですか？ 今回は、従来の注射によるものではなく、新しく承認された「点鼻」によるインフルエンザの予防接種についてご紹介します。

◆ 点鼻タイプによる予防接種とはどういうものか？

点鼻による予防接種とは、鼻の中にワクチンをスプレーする方法です。使用されるのは「生ワクチン」で、鼻や喉の粘膜に働きかけてウイルスの侵入を防ぐ抗体（IgA 抗体）を作り出し、粘膜免疫や全身免疫の両方を高めると考えられているものです。

◆ 従来の注射によるものとの違いについて

比較項目	点鼻	注射
ワクチンの種類	生ワクチン	不活化ワクチン
接種方法	鼻腔にスプレー	皮下注射
対象年齢	2 歳～ 18 歳	生後 6 か月以上
接種回数	1 回	12 歳以下は 2 回、13 歳以上は 1 回
費用の目安	約 8,000 ～ 9,000 円	約 3,000 ～ 5,000 円
効果の出始め	約 2 週間後	
効果の強さ	同 等	

◆ 点鼻タイプによるメリット

- 痛みがないため、注射が苦手な子どもでも安心して予防接種ができます。
- 1 回で完了するので、何度も接種しなくてよく通院の手間が少ないです。
- 鼻や喉の粘膜で抗体が作られ、ウイルスの侵入を初期段階でブロックしやすいです。

◆ 点鼻タイプの注意点・副作用

- 対象年齢が 2 歳～ 18 歳に限られており、19 歳以上は接種できません。
- 鼻炎などの症状がある場合、効果が下がる可能性があります。
- 接種後に起こりやすい副作用として鼻水・鼻づまり、咳、喉の痛みなどがあります。
- 接種後 1 ～ 2 週間はインフルエンザ抗原検査陽性となる事があります。
- 重度の卵、ゼラチンアレルギーのある方、重度の喘息や喘鳴の症状がある方、免疫不全のある方、免疫抑制治療中の方などは接種できない可能性があります。

点鼻による予防接種は、痛みがなく、1 回で済むという点で特にお子様にとって魅力的な選択肢です。今までインフルエンザの予防接種を嫌がっていたお子様も、これなら問題なく接種できる可能性があるのではないでしょうか。ただし、対象年齢や体調によっては接種できない場合もあるため、事前に医師と相談することが大切です。今回の内容が、インフルエンザ予防の新たな選択肢として検討するきっかけになれば幸いです。

執筆薬剤師　太田 雅俊